

感謝

高津住男

お世話になりました勝浦町、上勝町、神山町、そして宿舎「さかもと」のみなさん、お元気でしうか？今回の農村舞台公演は、わたしの四十九年間の俳優生活のなかで、かけがえのないものになりました。

徳島は凄いい。たとえ戸数が少ない集落でも、そこに住む人たちは、舞台をつくり、出演し、見物するという演劇習慣を、百年いやもつと前から持っていたんですね。舞台の場所が境内ですから、年間の奉納祭事、神様に向けての真つすぐな敬虔な祈りの一刻と、その後、肩の力を抜いて、仲間と舞台を見ながらの酒盛り・・・徳島を演劇王国にしたいですね。

今山の保存会のみなさんの、何日もかかっていた舞台準備。ありがとうございました。舞台左側の山の斜面。天狗の登場道の階段づくり。舞台正面をスカッとひきしめた御簾。ラストで全員が退場するときの堂々とした仮設花道。本番前日、夜遅くには、閻魔大王の持道具、棺桶まで作ってもらいました。数えたら切りがありませんね。それから、後日放映されたNHKテレビ（半年間、農村舞台現場を撮影したドキュメント）で知ったのですが、真屋順子の車椅子出演のために調達した同機種を舞台上上げての点検。しかも何回も何回も。あそこまでやって頂いてたんですね。本当に驚きました。そうだ。宿舎「さかもと」さんには、軽トラで棺桶を運んでいただいたりし

ましたね。今山で作って貰ったものの、夜の公演場所、三所神社まで、僕たちの乗用車タイプのレンタカーでは、大きすぎてどうしようもなかったのです。とにかく、損得抜き。演劇の原点とは、「人と人の、心の集いにある。」このことに、体で触れられるだろうと参加させてもらったのですが、想像以上でした。バカでかくて、深い体験でした。これは、今山の舞台出演のなかで、わたしの体がわかったことなのですが、勝浦座の、あの老武士の浄瑠璃人形。あの人形は、神さまだったのです。真屋が演じる瀕死の出雲の阿国を蘇生させる役。共演をお願いしたのですが、舞台上で、手を触れられた女優真屋順子は、うっとりとして目を開けていき、その高揚した表現は、少なくとも、わたしの知っている私的、仕事場の三十五年間で、間ちがいなく最高のものでした。これは、演技の上手下手を云って

いるのではないんです。恐らく老武士が、三人の遣い手によって真屋に近づいた時、その気配は、無垢な、自然な表現力を誘い出したのだと思うのです。あゝ、神さまのお使いなんだ、とハッキリわかりました。今迄、浄瑠璃に限らず、現代劇、



おとぎ話としての人形劇に得体の知れない感銘を受け、人形が登場する台本を、十本ちよつと書いてきました。（平成七年、城南高校創立百二十周年記念。「地球を抱くマリオネット」樹間舎公演も一例。）次回オリジナル台本は、また人形をテーマにしたい、と考えています。そう云えば、農村舞台を囲む杉の大木にも、神さまの気配がありますね。苔むす狛犬

にも、鳥居にも。樟の葉を裏がえす風にも、神さまの声が聞こえます。それからお客さま。公演日の、あの大雨のなか、傘を差して、でも背中を濡らしながら最後までわたし共、演者を見守っていただきました。開演直前からの大粒の雨にもかかわらず、お客様は誰ひとりとして、わたしに「中止ですか？」と、お尋ねにはなりません。でした。「お客さまは、神さまです。」



と云った歌手が居ります。わたしたち劇団の一人一人が、みなさまに支えていただった実感を、今回ほど持ったことはありません。これからも、おそらくないでしょう。神さま、これからもどうぞ農村舞台！よろしく見守っていてください。